ENGLISH ESSAYS

WITH INTRODUCTION AND NOTES

BY

Y. OKAKURA

LECTURER ON ENGLISH IN THE TOKYO HIGHER NORMAL SCHOOL

TOKYO

KENKYUSHA

1925

KENKYUSHA ENGLISH CLASSICS

研究社英文學叢書

大正十四年四月七日印刷　　大正十四年四月十日發行

主幹者　岡倉由三郎
主幹者　市河三喜
發行兼印刷者　小酒井五一郎
東京市麴町區富士見町六丁目七番地
印刷所　研究社印刷所
東京市麴町區飯田町六丁目一番地

發行所　研究社
東京市麴町區富士見町六丁目七番地
電話四谷二九五五番
振替口座東京二八六〇一番

非賣品

(芝赤羽橋　新榮社製本)

序

本書の註釋に際して自分が多く助力を受けた書物では、例の *N.E.D.* を初め、くさぐさの辭書類を別にして見ると、

Bacon's Essays, ed. by S. W. Reynolds; Oxford, 1890.

Bacon's Essays, ed. by F. G. Selby; London, 1907.

Essays of Francis Bacon, ed. by A. S. Gaye; Oxford, 1921.

Cowley Essays, ed. by A. B. Gough; Oxford, 1915.

Essays of Elia, ed. by Hallward and Hill; London, 1903.

Essays of Charles Lamb, ed. by G. A. Wauchope; Boston, 1904.

Lamb: Essays of Elia, ed. by O. C. Williams; Oxford, 1921.

Selections from William Hazlitt, ed. by W. D. Howe; Boston, 1913.

Essays of William Hazlitt, select. by A. Beatty; London, 1920.

と云つたやうな、一人一人の、多少註のある隨筆の全集又は選集のほかに、

The English Familiar Essay, ed. by Bryan and Crane; Boston 1916.

A Book of English Essays (1600–1900), selected by Makower and Blackwell, with notes by A.E. Schuster; Oxford, 1917.

Selected English Essays, chosen and arranged by W. Peacock, with notes by C. B. Wheeler; Oxford, 1918.

の如き隨筆集がある。それらを賴りに解釋の筆は進めてみたものの、謬劣の身の、思ひ煩つて、尙且つ心の落ちつかぬ箇所もかなりにある。

大正十四年五月五日　　岡倉由三郎

更衣ぬのこの恩のおもさ哉　　蕪　村

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

INTRODUCTION

I. 本篇の選擇方針

本書所載の隨筆の數は、すべて四十七篇、その作者の數は二十九名、之を選むに當つては、多數の English essays の選集に就いて、その中に最も屢々擧げられてゐる essayists のしかも最も多く選に入つてゐる作品を宗とし採錄したもので、註者たる自分の嗜好よりも寧ろかの國のこの道に心得ありと思はれる人々のそれを一層重要視したのである。斯くして擇んだ諸篇の筆者は Bacon より Meynell に至るまで、一人の米國人を交へてゐない、それは米國に essayist として尊重さるべき文人が皆無であるからと云ふのではない。同國にも Irving の如きまたは Lowell の如き温乎として情味の豐かな隨筆の上手はあるにはあるが、やゝもすれば Holmes の如く理智の力の勝ち過ぎたり又は Emerson の如くあまりに議論に夢中になつて、楯の兩面に笑ひと涙とを等分に濺いで自然の妙姿、世相の奇態に、悠々自適の評語を下す寛潤味に富んだ者を求める段になると、忽ち人不足の窮屈を感ずる。その人ひでりの中を、無理に搜して僅に數家を加へんよりは、一層のこと、この度は、本家のイギリスのみから人選を行つた方が、徹底味が多いかと、これは自分一量見で、さう定めたのである。そして英國側の作家に就いても故人となつた人々のみを採つた。現存の人でこの道の名ある才物の雄篇が本書に揭げてないのは、蓋しそのわけゆゑで、他に何の理由もないことを讀者は記憶ありたい。

本篇に立ち並んでゐる二十九家の順位は、單にその出生の前後

に基いて設けたもの、その一人一人の評傳は、極めて簡短なものながら、小引の形に於て各家の作品第一篇の前に之を掲げておいた。中に就いて Goldsmith, Lamb, De Quincey, Shelley, Carlyle, Thackeray, Stevenson の諸家はいづれもその單行の作品に由つて本叢書中に、すでに一回乃至二回、かなり詳細に評傳されてゐる。

II. Essay とは何ぞ

Essay と云ふ名詞の數々の意義を例の Murray の大辭書に就いて調べて見ると、三類十種の區別が立つてゐる。即ち、I. 類は "The action or process of trying or testing" で、その中に (1) 試み、ためし、(2) 見本、例、試演、(3) *a.* 鹿の肉の脂ののり具合を試すこと、*b.* 之に使ふ鹿の胸の肉、(4) 飲食物を貴人に捧げる時の毒見。II. 類は "A trying to do something" で、その中に (5) *a.* 盡力、努力、*b.* 盡力の結果、(6) 敵對の行動、(7) *a.* 習練の爲の試み、*b.* 草案、草稿。など枚擧してある、その數々の意義の中 (5) 以外はいづれも今は廢語として十標の下に實用から葬り去られてゐる。さてその次に (8) として擧げてある essay の意義、

"A composition of moderate length on any particular subject, or branch of a subject, originally implying want of finish, 'an irregular undigested piece' (J.), but now said of a composition more or less elaborate in style, though limited in range."

[何によらず、ある特殊の題目、又はある題目の一枝葉に關しても、あまり長からぬ文章で、本來は未成品の氣味あるもの、『一篇の不規則な、こなれてをらぬ作品』(ヂ氏) とは云へど今ては、その範圍に自由を缺いてはゐるが、文體に至つては、多少推敲を凝らした作物を云ふ。]

が即ち、自分が「漫文」と名づけ、「隨筆」「漫筆」の語を之にあてることを我が國語の中での一番近い譯語と考へるものである。上

揭の定義の中に (J.) として出してある一句は Dr. Johnson の「英語辭典」からの引用を示したもの、これに由つて我々は、この種の作物が、初めは一つの極めて不用意な感想錄から出發し漸次に精妙な、技巧を凝した文字と成つていつたことを知る。今日の essay は多量の彫琢を加へられることは事實であるが、彫琢練磨の結果、文字の上に一種のあく抜けがして、元々の簡古、素朴の眞實味が顯はれ Johnson の "A loose sally of the mind; an irregular indigested piece; not a regular and orderly composition" と云ふ定義が、依然として適用の出來るやうに思はれる作品であればあるほど、今日も一層よい essay であると云ふ、不思議の現象が、英文學のこの方面に實驗されてゐる。*N.E.D.* にはまた、上揭の (8) の定義の下に小さく附記して "The use in this sense is apparently taken from Montaigne, whose *Essais* were published in 1580." と云ひ、それから、III. 類として (9) "essay" を含む一つの廢句、(10) "essay" の複合詞數個を擧げてゐる。

"Essay" と云ふ語が「漫文」「隨筆」の意を示す經路がフランスの Montaigne にあること、この語が Bacon に用ひられるに至つて英國に入り爾來その中に宿る一種特別の文體が Cowley を經 Steele, Addison に移り、Lamb, Hazlitt の手に由つて大成され近くは Stevenson の靈筆で益々異彩を放ち、Belloc, Beerbohm, Chesterton など云ふ現存の才人を俟つて、いよいよその光輝を增さうとしてゐることは、本叢書第一輯の中の *Virginibus Puerisque* の總釋に、簡單ながら歷史的に述べておいた。その方面の考査を一層深く遂げていかうとする人々には、自分は *Social Studies in English Literature* (Houghton Mifflin Co., 1916) の中に收めてある L. J. Wylie 女史の "The English Essay, a Study in Literary Development." 及び Prof. H. Walker の *The English Essay and Essayists* (Dent & Sons, 1923) の一讀を薦める。そして自分はまた玆に、そ

の概要を說くことをせぬ。その代りに自分は次に少しく Essay の中に流れる氣分とも云ふべきものを述べたいと思ふ。

III. Essay の精神

我等が銘々の自我を取り圍んでゐる諸の現象に向つてその實相を究めようと企てる時の心の態度は多樣であるが、之を大別すると二つに歸する。その一つは、我等銘々の五感をは測定の據り處として各樣の實驗的査定を行ひ、之を滿足させ得ぬ解釋は、たとひ如何にまことしやかでも、決定的に之を正しいとは斷ずることをせぬ態度、この理智を基とした用心深い考査の形は、たとへは相摸取る時の土俵の上の定めに於て、指ならその爪先の一分を砂に觸れ、踵ならその片はしを二三分蹈み切るが最後、如何に餘力に富み、如何に元氣に充ちてゐても、抗議の餘地なく、負けを宣せられるのと一般で、さう云ふ規定であると云ふ理由の下に、その考査の樣式に由つて行はれぬ考察は所謂非科學的なのである。 unscientific なのである。しかし理智とは蓋し我々の心力全部の謂ひではなく、一杯の牛乳の面に張る薄い一枚のクリームの甘皮にも比すべき、全體から觀てやゝ形を成しかけた一小部分にすぎないものと思ふ時、理智一點張りの所謂 scientific な考査にも、不備な點の多々あることを我々はしみじみ感ずる。我々の肉體と云ふコップに盛つた我々の自我の念全體が、その中に宿る心持を、ありのまゝの感じとして本能的に懷く時、我々はそのやゝ渾沌たる狀態にあるの故を以て直に一顧の値もないものであるかのやうに扱つてよからうか。この自然の叫びに耳を貸さうとする者を一も二もなく unscientific と今の世人は思ふ。如何にも尤千萬なことで、例の五感專門の考査の樣式を scientific と云ふならは、なる程これは scientific でないのである。science の如く理智のみを重んじないのである。かく理智のほかにも心の本能的の聲、太古からの各樣の

我々の、或は我々以前の、經驗が我々の肉體に刻みこまれ、習ひ相性を成しての本能の發言をも、例の science のそれに對しての如く、當に尊重しようと云ふのが、即ち、萬象說明の第二の心の態度なのである。

これら二つの心の持ち方の中、第二の方が、いづこ、如何なる人種に就いて見ても自然のものであるが、所謂人智が旺盛になりゆくに連れ第一の物の見方が次第に頭を擡げて來る。ヨーロッパでは第十八世紀の末葉から、それが漸く力を增し、十九世の中頃に入つては science の呼聲益々高く、破竹の勢當るべからずして押し進みはしたが、その頃から一派の人々には、土俵の上の規定に餘りに囚はれ過ぎても見えるこの scientific な事物の解決ぶりは、何となく物足らぬ感を生じ、rationalistic な心持に mystic な分子が漸次に侵入して理智よりも情味が、頭腦より心情が勢を增すに至つた。これが昨今の我々の心の狀態と云つて大差はなからうと思ふ。

以上に名狀し來つた二つの心の態度の中、理智に偏する方は mind をその根城とし、そこから世上の事物を觀察し、之に評語を下す時、結果は奇智に富んで wit となり、之に反して今一つの情味に偏する方は、その本據を heart に置き、そこに腰を据ゑて眼を四方に注ぎ、かくて心の動く所を述べるとき、結果は禪味が豐かで humour を生む。蓋し wit と humour は共に奇警と洒落との意味で一見似寄つては見えるが humour の方は "less intellectual and more sympathetic than wit" なのである。そして wit が一層力を示すのは何々の「論」、しかじかの「議」などに於てで、humour の專ら顯はれるのは何々の「說」、しかじかの「談」などの上にある。こんな風に物を考へて來ると自ら wit を、固くるしい、scientific precision とやらを重んずる論文の精神とするに、反して、邪のない思ひを、さらさらと說いてのける隨筆の、漫文の、essay の精神には、禪味が、茶が、humour が如何にも相應はしく感ぜられる。

諧味、茶、humour と、かう列べて、その間に一道の共通な心持を認めるが、この三つは、そもそも甚麼の因緣あつて、斯く類似點を深く帶びるに至つたのであるか。その中の humour と云ふ語は、本來は中世の醫學に於て人間の體内を巡る一種の「うるほひ」(L. (*h*)*umorem*, moisture) と考へられたもので、それに (1) blood, (2) phlegm, (3) bile, (4) black bile の四通りの別を想定し、その一つが勢を得る時、それぞれ或は sanguine に、或は phlegmatic に、或は choleric に、又は melancholic に傾く氣分を示すと思つたのであつた。そしてこの四通りの「うるほひ」が如法に調和を保つ時、心は平靜で人の氣分 (temper) は平穩なのである。所が一朝この四通りの「うるほひ」の調合がその平均を失ふと吾々の心は動いて out of humour となり、bad humour に陷り、bad temper を示すものと昔の人は考へた。この考から humour と云ふ語次第に state of mind を、mood を、次には inclination を、次には facetiousness を、comicality を示すに至り、進んでは、「をかしみを認める力」を、更に進んでは「をかし味」(jocose imagination) を指すに至つたのである。併しそのをかし味も奇智の氣の利いた笑より寧ろ情味の優つた笑ひを基としてゐることは、既に上に述べた。要するに humour の笑ひは、人の世の淋しさ、はかなさを達觀して、之を痛ましと思ふ同情の念に驅られ、之をいたはり、之に親しんで、涙片手に、浮べる無邪氣な、なつかし味の豐かな笑ひである。

我等大和民族の祖先たちは、宇宙もろもろの心に經驗する事物の中、五感に訴へる部分を「もの」と云ひ、心に訴へる部分を「こと」と云ひ、その兩方面を引きくるめて「ものごと」と名づけてゐる。吾々人間を靈的方面から相呼ぶ時互に尊んでは「汝(な)か命」と云つた。「命」とは卽ち「御こと」である。この「こと」は古代ギリシヤ人の謂ふ 'logos' と著しく似通つた内容の語である。また「こと」に對して「もの」は凡そ形體を有する一切の諸物の謂ひで、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

之に對する賞翫と同情の心を古くは「物のあはれ」と呼んでゐる。この場合の「あはれ」は beauty と sadness との兩面を備へた名詞であることが、これと意味上同じ傾向の形容詞の「かなし」と相竝んで、我々の祖先たちの人世觀の一端を窺ふ一助ともなる上から見ても亦、事物の美しいと同時に悲哀に滿ちてゐること、即ち、「かなし」く「あはれ」な姿を認めることが英國で云ふ humour の示す眞意であることを偲ぶ上からも、寔に自分には興味深く感ぜられる。さう感ずる時自分にはまた essay の神髓は、どう考へても、「物のあはれ」を、事の「かなしさ」を、humour を、その基調としてゐるやうに思はれてならない。但しこの場合の essay とは「隨筆」「漫文」など上に名づけた例の "personal" essay また の名 "familiar" essay の事であることは勿論である。

Essay の基調を斯く humour に置く時、そこに禪味が宿り、俳味が加はり、茶の趣が添はる。これ蓋し、「物のあはれ」を感じ、事物のかなしさを悟つて、世相の煩はしき中に親みと美しさとを認めての筆のすさびなるが故に外ならぬのではあるまいか。禪味とは何？ 禪僧的の世相觀に基く心情である。抑も禪とは、六種の得道の法式（謂はゆる六波羅密）の一で、思索內觀に由つて悟道を求める meditation（「禪那」dhyânâ）の道で、達磨大師の齎した形式の禪が、たまたま專ら奇警味に富み好んで paradox を用ひて葛藤を釋いたが爲に、支那を經てその形を採り入れた本邦の禪はいきほひ極めて逆說的の敎である。隨つてこの道に參加して悟入の步を進める者は、提唱を聽く折々、禪堂に默想する時々、幸に事物の楯の兩面を觀じては、convention の迷夢から破れて、覺醒の眼を開き、目前に展開し來る世間の實相に對し、一は以て之を愛でいつくしみ、一は以て之を憐愍の對象とする。この時この際、往々にして涙に滿ちた笑が漏らされるのである、humour は著しく働かずにはゐないのである。

禪那に由る悟道の教義は、王朝の頃既に我が國に知られてはゐたのであるが、それが禪宗として著しい勢力を有つに至つたのは鎌倉時代に入つてからのことで、この時代に謂はゆる五山の僧は當時の宋の文化と親しく接しその影響として大に彼の地の風物をも移入した。その中には茶の樹の栽培と、その葉の煎汁の服用も、服用に關しての樣儀と共に禪僧の手から當時の上流社會ならびに一般の有識階級の間に次第に廣く傳へられた。但し、茶（古くは「茶」とも書かれた）は、夙に王朝に於て我が國に渡來したのであるが、當時は一種の藥物として扱はれ日常の飲料としては用ひられなかつた。その後鎌倉時代の末に禪僧が再び之を珍重したのも、素より初めは心氣を鎭め精神の力を振興する爲の半藥用品で、茶の葉を粉末にして之に胡椒の如き他の藥味を適度に加和し、湯を注いで攪拌し之を喫したのであつた。その喫飲は禪寺の食(ぢき)堂などでの事であるから、之に伴ふ談話も自ら禪門に關聯した悟道の上に涉りさうなこと。これが次第に民間に弘まつて行く時、抹茶が禪宗と結びついて、床の掛物にも禪僧の語や讃が多く、達摩の畫像がよく顏を出すのを我々は怪む必要はない。「禪味」卽ち「茶」の equation は斯くして生じたのである。隨つて、「物のあはれ」を感じ、事物のかなしさに心を留め、そのさびしさ、わびしさの、「さび」や「わび」を樂んで、有爲轉變の世相の上に注ぐ滿腔の涙を、會心の微笑、さては大悟徹底の哄笑一番に寓する禪宗の行き方、その世間化した茶道のやり口が、多量の humour を含むのは當然のこと〻自分は思ふ。

およそ如何なる人でも wit と humour とは、皆、量の多少の別こそあれ、大概有つてはゐるが、世間を相手に手腕を振ひ活動飛躍を試みる時は wit が主として働き humour は深く personality の內面に潛む。そして世間が鎭まつた心靜かな氣分になると、足音の絕えるのを待つて鳴く河鹿のやうに、humour がそろりとその頭

を擯ける。Bacon の如き性行の人が英國の "familiar" essay の元祖であることが、さうでないと說明しにくゝなる。Shelley のやうな生眞面目の人の essay の筆が、つひ論議に專らで、親みの足らないのも humour が不十分である爲と思はれる。Lamb や Stevenson がこの道の大々的な宗匠であることも、その禪味の豐かさから來るのであるとは、誰も認めずにはをられまい。この二人は、眞の最もよい意味に於て禪味の享有者なのである最高の茶人なのである。更に言へば、芭蕉を俳人と云ふと同じ意味に於て、俳人なのである。

以上に述べ來つた所は Essay の精神に關する自分の所信で、或は自分一人だけの、氣まぐれな一片の思ひつきに過ぎぬかも知れぬ。君の所論を正しいものと認めるだけの科學的基礎が不足であるなどと眞向から大上段に理智の穿鑿を向けられては、自分は何とも明答の途がない。たゞさう云ふ人の眞面目の顏を微笑で迎へながら、それ、さう云ふのが wit の働きから來る議論で、僕の言つてゐる、この取りとめのない所が humour に基く Essay の氣分なのだ、と逃口上を言ふほかは自分にはない。

CONTENTS

INTRODUCTION

PAGE

I. 本篇選擇の方針 i

II. Essay とは何ぞ ii

III. Essay の精神 iv

ENGLISH ESSAYS

FRANCIS BACON

Of Studies 1

Of Adversity 2

Of Gardens 4

Of Friendship 11

SIR THOMAS BROWNE

On Dreams 19

THOMAS FULLER

The Good Schoolmaster 24

JEREMY TAYLOR

On Death 29

ABRAHAM COWLEY

Of Solitude 33

Of Myself 40

JOHN DRYDEN

Character of M. St, Evremont 47

JONATHAN SWIFT

The Art of Political Lying 51

SIR RICHARD STEELE

Recollections of Childhood 57

A Prize Fight 61

JOSEPH ADDISON

Sir Roger de Coverley at Home 67

Sir Roger at Church 71

Death of Sir Roger 74

Popular Superstitions 77

ALEXANDER POPE

On Epic Poetry 82

HENRY FIELDING

On Taste in the Choice of Books 88

SAMUEL JOHNSON

On Sorrow 94

The Advantages of Living in a Garret . . . 99

Molly Quick's Complaint of Her Mistress . . 106

DAVID HUME

Of Simplicity and Refinement in Writing . . 110

OLIVER GOLDSMITH

Happiness in a Great Measure Dependent on Constitution 126

The Man in Black 120

CHARLES LAMB

All Fools' Day 125

The Convalescent 129

A Bachelor's Complaint of the Behaviour of Married People 134

WILLIAM HAZLITT

On Nicknames 144

On Going a Journey 154

LEIGH HUNT

A 'Now' 167

On Getting up on Cold Mornings 170

THOMAS DE QUINCEY

On the Knocking at the Gate in *Macbeth* . 175

MARY RUSSELL MITFORD

The First Primrose 181

PERCY BYSSHE SHELLEY

On Love 187

On Life 189

THOMAS CARLYLE

The Opera 196

DR. JOHN BROWN

"With Brains, Sir." 204

WILLIAM MAKEPEACE THACKERAY

On a Lazy Idle Boy 213

Tunbridge Toys 220

JOHN RUSKIN

The Extension of Railways in the Lake District 229

MATTHEW ARNOLD

Dante and Beatrice 236

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook